
狐の御護り

みよーめー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐の御護り

【コード】

N0606M

【作者名】

みよーめー

【あらすじ】

古くから世界の裏側で存在していた“妖魔”。

その“妖魔”の一族の一つ、“狐族”のとある少女。

そして何の変哲もない人間のとある少年。

彼等を中心とした物語が、今始める。

*元々以前投稿していた作品を再投稿しています。文章を手直ししつつ、挿絵も同時に描いて投稿するので、凄く更新は遅いかもです。

狐の御護り 其の一（前書き）

どうも初めまして、久しぶりの方がいたらお久し振りです。

この「狐の御護り」は私が以前載せていた作品ですが、この度再投稿で載せることになりました。

今度は文章を手直ししつつ、挿絵も同時進行で描いていくので、更新速度は遅いかもかもしれませんが、どうかご了承を。

狐の御護り 其の一

東洋の島国 日本……。

この日本で古くから伝わる伝承や昔話は 実在する。

桃太郎の鬼や座敷童子といった数々の異能なる存在。

このような日本独特の雰囲気を持つ伝承等は、在る限りはその時代は続くものである。

それらが日本の文化の一部で、一時は人々の娯楽となったのだから、在り続けるのも悪くない。

だが、そのような意見はあくまで仮想の中でのこと。

本当に実在していて、多くの人々にそれが知れ渡っていれば話は別になつていたのかもしれない。

当の本人達 「妖怪^{ようかい}」という名称で呼ばれる者達も、自身の存在を隠し、言われざる闇の世界で生きていた。

ごく僅かの人々は、その存在に勘付くことが出来、独自あるいは組織としてその者達の存在の謎を解き明かすために、水面下で動いていたりした。

妖怪と接することが出来た人々は、稀に種族の境を越えた触れ合いをしたりした。

そしてその延長で、人間と共に妖怪も繁栄していった。

今から語られる話も、人間と妖怪の触れ合いを描いた話である。

一人の人間の少年と、一人の妖狐（きつね）の少女の奇妙な物語を、これから話していこう。

狐の御護り 其の二

現代の日本。

戦後数々の技術を創り上げ、外国から取り込み、今や世界でも有数の国家となった。

その裏では、数々の妖怪・魑魅魍魎が渦巻いていることを、人々は知らない。それどころか、ハイテクノロジーの生活や企業による近代化が進む中、彼等の存在は徐々に忘れかけられていった。

とある都道府県の都市にて。

現在は夜空で星が煌く夜で、様々な建物のネオンサインや電光と共に、闇の世界に独特の魅力を彩りしている。

その都市にある一つの建物の屋上に、人影が一つ。人々が夜の世界を楽しんでいたりする様を、その屋上から見下ろしている。その人影は、屋上の細い柵の上にバランス良く立っている。

「うわ〜！ 都会って凄いですね〜。こんなに人がいっぱい。田舎の何倍なんでしょう？」

人影から、歡喜に満ち溢れた声が出た。さわやかで鈴とした声色ながらも、何処か幼さを感じさせる声であり、男性や青年ではないことは確かだ。つまり少女である。

その姿は、まだ暗闇の色が濃い屋上では確認し辛い。

少女は眼下にある都市を興味深そうにして、観賞することに熱中している。

そうしていると、彼女の身体からピロロ、と機械的な音が鳴った。

「あ、宵様からいただいた「けえたい」からちやくしんと言つ音が」

少女がその音にあたふたして、懐から手の平サイズの細長い物を取り出した。それは携帯電話である。やかましく鳴り続ける音に慌

てながらボタンを押し、電話に出る。

『おつせえ！！ 私がアンタに電話するのこれで五回目だよ！？
今までの四回はどうして気づかなかったんだい！？』

携帯を耳に押し当ててるなり、そこから怒声が響いた。

少女は「ひゃあ!？」と叫び、驚きのあまり携帯を放り投げてしまった。柵の上に居たこともあり、携帯は屋上から落ちていつてしまった。

「ああ!？ けえたいが!」

何の抵抗も無く、携帯は重力に引かれて眼下の都市へと落下。その間も携帯から『おい聞こえてんのかい!？』と、怒声が響く。

「いけません!」

声を上げ、その人影は何の躊躇も無く、屋上から飛び降りた。空中で器用にクルリと一回転すると、建物の壁に足を着かせ、壁の上を落下しながら走った。

瞬く間に携帯との距離が縮まり、人影は両腕を前に突き出し、携帯をキャッチしようとする。後少しで手が触れるところまで来ているのだが、どうにもその後少しが中々上手くいかない。携帯は嘲笑うかのように、ふわりひらりと舞って突き出す両手の上を踊る。

「う〜ん! え〜い!」

その人影は唸りながら、両手を乱暴に振り回す。しかしキャッチ出来ない。

そうこうしている内に、地面との距離が狭まってきた。このまま行けば、地面に激突してしまう。

「はい!」

意を決したような声を出し、人影は壁を思い切り蹴って跳躍した。スピードが一瞬加速し、見事携帯をキャッチした。

「やった〜! 宵様! やりましたよ! 私やりました〜!」

『あん!？ 何だつて!？』

携帯を取り戻した事に子供のように喜ぶ。携帯の向こう側からは、乱暴に状況を訊いてくる声が聞こえる。人影は歡喜に満ち溢れてい

ると、ハツとした顔になり、地面が目前に迫っているのに気づいた。
すぐさま態勢を整え、

「ほ っと！」

ストン。静かな音を響かせ、華麗に着地した。

居場所が暗かった屋上から、明るい繁華街に移ったため、その人物の姿がはつきりと分かるようになった。

その人物は、鮮やかに靡く金色の長髪をしており、瑠璃色の瞳をした少女であった。服装はシンプルな白と紅を基調とした、巫女装束を着ている。

> i 8 2 1 2 — 3 5 <

「ふゝ……危なかったですね」

金髪の少女は携帯を胸に押し当て、ホツと息を吐く。
とそこで、周りの異様な空気を察した。

「……………」

彼女が着地した繁華街の周囲の人々は、目はポカン、口はあぐりりと、啞然となっている。それも当然だろう。空からいきなり金髪の巫女少女が、降って来たとなれば。

「あ……ははは……」

少女はまずいと云わんばかりの表情になり、引き攣った笑い声を漏らして、そそくさとその場から走って去って行った。

残された人々はそのまま動けずに、少女の姿が消え去るのを目で追うしか出来なかった。

金髪の少女は人気の無い路地裏まで走ると、周りに人が居ないのを確認し、携帯を耳に当てた。

「宵様？ もう大丈夫で」

『黙りやがりなこのくそつたれのアホボケカスがああああ!!!』
携帯の向こうから、電波の許容を遙かに超える音量が轟きを上げた。少女の腰まで伸びている金髪が、横一直線に吹き荒れる。

「はああう!?!」

『んなあゝんで今まで私が電話してんのに出ないんだい!? しかもやっと出たと思つたら全然返事もしないで訳の分かんないことばつかくつちゃべりやがつて!?!』

「ご、御免なさいです! ちょ……ちょっと」とらべる「に巻き込まれまして!」

キーンと耳鳴りの痛みに耐えながら、少女はペコペコと腰を折つて謝る。

『「トラベル」は旅行だろーが! そういう時に使うのは「トラブル」だよ! 横文字弱い癖に無理して使わなくて良いつつーの!』
言葉の間違いを指摘された少女は、再び「御免なさい……」と謝った。そんな彼女の様子に、電話の声は重い溜息を吐いた。

『全く……どうしてアンタみたいな未熟モンが抜擢されたんだろうね。成熟してんのは胸だけじゃないか』

何気に言い放たれた言葉に、金髪の少女は自身の胸に視線を落とす。

「私のおっぱいって、普通よりも大きいんですか?」

少女の見かけは若干十代後半ぐらいの容姿で、確かに今時の同年代に比べると胸の豊かな膨らみは明らかに別格であった。

『んなどうでも良いことに注目してどうすんだい。そんなことより』

軽くツツコミを入れた後、電話の声は急に緊張した声色で話し始める。

『良いかい? 今回はアンタが今までやってきた修行とかとは全く違う。マジな仕事なんだよ? 本腰入れてかないと、死ぬよ?』

その言葉に少女は力強く「はい!」と返事をして、先程の頼りなさそうな雰囲気は何処かに行ってしまうていた。

『残った手がかりは後一つしかないんだ。敵さんよりも先に見つけ出して、何と少しでも護り抜くんだよ？ ま、私もいるから楽勝だと思っけどね』

「大丈夫です！ 任せて下さい！ どんな一族の刺客が襲ってきて、頑張ります！」

少女の意気込んだ声は、誰もいない路地裏で大きく響いた。

狐の御護り 其の三

ここは関西地方にある都市・近恵市。このえし

現在の時刻は四時過ぎ。

その都市の住宅街にて、トボトボと歩いている少年が一人。何処となくぼんやりとした表情をしており、少々足取りは重い様子。着ているのはどこかの高校の制服であり、左肩に掛けてある鞆共々全く汚れやほつれが無いのを見ると、真新しさを感じる。

それもそのはず、彼はこの年から高校生になつたばかりの新生。

彼の名前は柏木 かしわぎ 明人 あきと。

長くも短くもない黒髪を、微風で僅かに靡かせている。全体的に整った顔立ちをしているが、目は若干鋭い目つきをしている。その目つきのせいか、第一印象は少々「やんちゃしてます」みたいな雰囲気を感じさせる。身長は百七十cmの前半と、これまた平均クラスで、悪く言えば平凡クラス。

彼の足取りが重いのは、何も入学早々イジメられ、人間関係に悩んでいるわけではない。ただ単にぼんやりとしているだけである。しかしそれに理由が無いと言えば嘘になるが、何気にぼんやりとしている感情の方が強い。

彼には実のところ、両親がいない。二人は幼い頃に事故で亡くなつてしまい、それ以降彼の世話をしていたのは祖父であった。

元々関東の方に住んでいたが、祖父に引き取られて関西の方に越して来た。

祖父は一風変わった人物であり、近所からも「変わり者」として知られていた。性格は細かいことは気にせず、おおらかで豪快な人柄で、一緒にいて楽しく感じ、それでいて疲れを感じさせない人物である。幼い頃に両親を亡くして心身共に沈んでいたが、祖父のお

陰で元気を取り戻すのにはそれ程時間は掛からなかった。

だがそんな祖父も、今年に入って間もなくして、亡くなった。

明人が病院で看取っている中でも、決して苦しそうな様子は見せず、静かに笑いながら最期を迎えた。

しかし彼は祖父が亡くなっても、涙や悲しげな表情は見せなかった。最期の様子を見て、祖父は決して死に怯えてはいなく、抵抗もせずに受け入れていたと確信したからである。そう思うと、確かに祖父らしくてたくましいと感じ、吹っ切れることが出来た。

そして祖父の財産等も受け継ぎ、一人暮らしとなっても生活には金銭的な苦しさはなかった。

それでも祖父のことを時折思い出すと、やはり長い間親代わりであった人物であったため、たそがれることもしばしば。

そうこうしながら道を歩いていると、家の前へと着いていた。

二階建ての一戸建てで、庭付きでまあまあ広い。

「もう着いたのか」

そう呟くと、玄関へと入っていった。靴を脱ぎ、リビングへと入るなり鞆を放り出して冷蔵庫を開ける。

中にあるペットボトルの容器に入った飲料水を一飲み。「プハッ」と声を漏らし、しばし静止した状態で何か考え込む。

（あ、今日借りてたビデオの返却日じゃねーか！ うわ、だりい…）

明人は心中でそう思いつくと、途端に苦い表情になった。

しかしすぐにジョギングくらいのペースで自室へと駆け込んで行く。階段を上がって自室の部屋に入って一分後、青いセカンドバック程の大きさの袋を手にとって部屋から出てきた。

そのまま玄関を出て鍵を閉めると、庭の片隅に置いてある自転車に乗り、ビデオ屋へと直行して行った。

同じ近恵市の中心地域。そこでは多種多様な店舗が所々建てられており、現代感をとても匂わせる地域である。本屋やCDショップに洋服店等があり、多くの世代の人々で溢れていた。

その地域のとある路地裏で、一つの人影が走っていた。

走っている人影の数秒後に、人の半分程の大きさの影が複数走り、いや、追っている。

少々息を切らせながら走っている人影は、自分の後を追っている複数の影の方へと振り向く。

「もう見つかつてしまいましたか……！」

首を前に戻すと、近くに転がっていたゴミ箱に目を付けた。

急ブレーキして足を止まらせ、そのゴミ箱を複数の影に向かつて蹴り上げる。中に入っていた空き缶やビニール袋を撒き散らしながら飛来していく。

しかし複数の影は、速度を変えずに器用にそれを避けた。

「も〜う！」

人影は悔しそうな声を出し、再び走り出した。

「宵よい様に、知らせた方がいいかな？」

そう呟くと、懐から携帯電話を取り出した。走っている状態で携帯のボタンを弄り始め、ボタン音が何度も小さく響き、しばらくすると人影から呻き声が漏れ出す。

「ふえー！ 電話帳ってどうやってたら開けるんですかーっ!? ぶつくま〜くふあるだと言うのが出たんですけどーっ!? 宵様ーっ！ もう一度だけ操作方法を教えてくださいーい!!」

突然狭い路地裏で、叫びにも似た声が木霊した。

明人はすでに近恵市の中心地域にあるビデオ屋から帰っていた。

そんな彼は今は自転車には乗っておらず、徒歩でいる。人気の多いこのような中心地域では、自転車で走るのは困難　というより迷惑だ。

自転車は近くの駅に置いてきてある。ビデオ屋の用事を済んだことなので、彼は駅へと向かっていた。またぼんやりとした様子をしているが、頭の中は考え事をしている。

それは、学校のことであった。

明人の通っている高校は、宝陽ほうやう高校と言ったところで、部活動は豊富かつ盛んであり、進学率・就職率共に平均率で安定している。

まだ入学して一ヶ月も経つか経たないかぐらいで、自分は部活動に所属するか、無所属（帰宅部）にするか迷っている。明人自身、体格や体力は平均クラスで、身体を動かすことはそれ程嫌いではない。

しかし本人の心中は、面倒な授業が終わった放課後までも、学校に管理されるということに抵抗があると思っていた。おまけに休日も学校に行かなければならないので、学校生活最大の自由時間が削られるのが一番嫌であった。

（やっぱり無所属にするかな……）

人混みに紛れながら思考していると、あっさりと結論に達した。

次に考えるのは、クラスメイトのこと。

（まあ、もう殆どと会話してるし、中学からの奴もいるし、初めて見る方もそれなりに冗談言い合える奴が出来始めたから問題ないか）
明人は、祖父に影響されてまあまあ受け継いだ性格もあってか、クラスの人間関係も良好のようだ。

それ程悩むこともないと思うと、駅も近くなっているのに気づき、ひたすら歩いていった。

にぎやかな中心地域から少し離れ、人気も少なくなっている駅周辺の路地。

歩いていて不意に欠伸が出て、「ふぁ」と声を漏らした瞬間

身体の真横に衝撃が起こり、欠伸をしていた顎に何かがつつかった。

「~~~~」

明人は衝撃に流されて宙に飛ぶ。

一瞬、世界がスローモーションになったような気もした。その態勢のまま近くの金網にぶつかり、アスファルトの地面に落ちた。

「ぬいっ！！ あひよら（顎が）！ あひよら（顎が）！」

顎を片手で擦りながら、ぶつかってきたモノを見上げる。

そこには、オドオドしながら自分を見下ろす人影がいた。

「へめー、ひろりふふあつれおりららら……あひやらりりひゃい

（てめー、人にぶつかっておきながら……謝り無しかい）！！」

顎の痛みが引かず、呂律が回らない口調で怒鳴る。

「ああ！ ご、御免なさいです！ 貴方の御顔に肘を……。正面を見ておらず、不束者でございましたあ！」

目の前の人物は何度も頭を下げ、謝罪する。

明人は目を凝らしてその人物を見た。

その人物は、鮮やかに靡く金色の長髪をしており、瑠璃色の瞳をこちらに向け、驚いたように両手を口元に当てている少女であった。

「……………」

明人はその少女を見ると呆然となった。ぶつかった相手が男だと思っていたのに、それがとびきりの美少女であったから。

呆然となる理由もそれだけではない。

少女は身体に、上半身は白、下半身は紅の巫女装束を着ていた。

ただでさえ綺麗だと言える少女が、巫女さんの格好をしていて、さらにその美しさが引き出されていた。あまりの美しさに、怒りや痛みを忘れてただただ呆然となる。

「……………」

「……あの、大丈夫ですか？」

しばしそうしていると、金髪の少女が屈んでこちらの顔を覗き込んでいた。少女は困っているような顔を数秒こちらに向けていたが、突然彼女の顔が強張った。

「!?!? ……追いつかれてしまいましたね」

そう言つと、身体を起こして後ろの方へと向きを変える。

「?」

明人が「何が？」というふうに顔を横に動かし、少女の正面を見ると、

彼女の前方に、褐色の鷲が三匹、羽をたたんで地面に立っていた。

鷲と言っても、大きさが異常過ぎる。地面に立っている態勢だけでも、普通の人間の腰辺りまでの身長をしている。

「どうしても逃してはくれないようですね。私は戦いたくないというのに……こうなっては堪忍袋の緒が切れましたよ」

少女は、先ほどの慌てようとは思えないような強い口調で言い放ち、鷲達を睨んだ。

> i 8 2 8 7 — 3 5 <

狐の御護り 其の四

駅周辺の路地で、地面に座り込んでいる明人^{あきと}、金髪巫女少女、彼女を獲物のように見る三匹の鷲がいる。

(何これ……)

明人が心中で動揺した直後、一匹の鷲が翼を広げ、真上に飛んだ。少女は深呼吸をし、両手を前に突き出す。

すると次の瞬間、彼女の両手が、燃え上がった。

明人はその光景にギョツとなつて目を見開く。

彼女は炎を纏った両手を構える。炎は服にも届いているのだが引火せず、纏っている両手も全く火傷を負っていない。熱風によつて少女の鮮やかな金髪が踊るように舞った。

しかし変化はそれだけではなかった。

少女の頭の両端に、髪色と同じ金色の猫科のような耳と、お尻から金色のふわりとした尻尾が現れたのだった。

(な、何なんだ!? 特撮か!? オタクのコスプレか!?)

あまりの現実離れの光景に、明人は頭が混乱する。

一方、鷲はそのまま上昇し、一定の高さに来ると両翼を大きく振るった。

するとその翼から何本もの羽が、銃弾のように放たれた。鋭く風を切る音を出し、下にいる少女へと飛来する。

「無駄です」

少女は呟くと、自分に向かってくる無数の羽を炎を纏った左手で薙ぎ払った。

羽は炎により瞬時に焦がされ、燃え滓だけが虚しく空を舞った。

攻撃が見事無力化された鷲は、耳を劈く甲高い声を上げ、上空から少女に向かい急降下。

それに合わせたように、残された二匹の鷲も彼女へと突進して来た。

少女は慌てた様子もせず、炎を纏った両手を合掌させる。

三匹の鷲が少女に到達しかけた瞬間、両手の炎が大きさを増し、少女の身体を覆った。

鷲達は予想外の事態に怯み、動きを止めた。

「ここからはひたすらに私の攻撃です」

炎の中から、少女の声が響く。

その身体に炎を纏ったまま、彼女は地面を蹴って鷲に向かって跳躍した。

動きを止めていた鷲達は咄嗟のことで回避が間に合わず、三匹の内一匹が少女に首根っこを掴まれた。

彼女は鷲を掴んでいる腕を振りかぶり、地面に勢い良く叩きつける。

鷲が嘴を大きく開いて「グエツ!？」と呻き、それと同時に少女の炎が鷲の身体を飲み込んだ。激しい業火に焼かれ、路地に貫くような鷲の悲鳴が響いた。鷲の身体は塵と化し、炎に流されていった。少女はすぐさま残りの鷲達の方に振り向き、右腕を大きく振るう。身体の炎が右手に集束し、そこから火炎放射器のように炎が鷲達にばら撒かれた。

二匹の鷲は即座に飛び立ち、その炎の脅威から逃れる。

「甘いです」

少女はそう言い放つと一際大きな炎をその身に纏った。

その炎を再び右腕に集め、勢い良く突き出す。巨大な炎は先程のように鷲の方に放たれる。

「逃げ場はありません!」

するとすぐに変化が起こった。

放たれた巨大な炎は突如抽象的な手の形に変形し、速度を上げて

鷲に迫った。それが一匹の鷲を飲み込もうとした直後、少女が右手をぐつと強く握った。それに呼応したかのように、炎の手は五指を内側に曲げ、鷲を握り潰す。

鷲の断末魔すらも飲み込み、その姿は塵となっていた。

「まだ 戦いますか？」

二匹をいとも容易く斃した少女は、炎を纏ったまま残された最後の鷲を睨む。

睨まれた鷲はさも悔しげに「ギヤアギヤア」と喚き、飛び去って行った。

「ふう……」

飛び去ったのを確認すると、少女は安堵の息を吐いた。

そして身体の炎を消し、事態においてぼりであった明人の方に顔を振り向かせる。

「大丈夫ですか？」

「あ……」

少女に声をかけられ、呆然としながらも何とか頷く。

その答えに安心したのか、少女は顔をニコリと笑わせ「良かったです」と言った。彼女が笑うと、頭に生えている猫科の耳と尻尾が、ヒョコヒョコ動いた。

「申し訳ありません。私達の戦いに巻き込んでしまって……」

「あ、君って……何者？ それに、その変な耳と尻尾って……」

心底すまなさそうにしている少女に、明人はようやく呂律が回ってきて、まともに喋り始める。

「ひゃわっ!!」

明人が耳と尻尾を指摘すると、少女は思い出したように驚き、頭の両端の耳を両手で押さえてお尻の尻尾をシュルルと丸めた。

そして猛ダッシュで走り、路地の隅っこで蹲った。

（ど、どうしましょう！ 私達の戦いは見られてもまだ誤魔化しが通りますが、正体まで見破られると大変なことに！）

怪訝に思う明人を尻目に、少女は心中で焦っていた。

「ど、どしたの？」

隅っこでアワアワとしている少女に戸惑いながらも声を掛けると、少女は「ひゃあ！」と驚き、

「見ちゃ駄目ですうっ！ 嫌ぁー！ーっ！！」

途端に悲鳴のような声で泣き叫んだ。

その様子に、明人は焦った。こんな人気の少ない路地で少女と二人きり、しかも蹲りながら「嫌」と叫ばれたら、通り魔か何かと勘違いされてしまう。

「ごめん！ 何か悪いことしたならオレ謝るから！」

「悪いことなんてしてないですう！ でも、嫌ぁー！ーっ！！」

「何が嫌なんだよ！？」

「「半妖態」が解けないんですうーっ！！ これじゃ正体がバレちゃいますよおーっ！！」

何やら分からないことを言われ、さらに戸惑う。

もういつそ逃げてしまおうかという思いが過ぎった。

少女は蹲ってしばらくは泣き止む感じがしない。

(よし、逃げよう)

これ以上面倒に巻き込まれるのは御免だ。明人がそう決意し、ソロソと足を動かそうとしたが、それよりも早く少女が路地の出口の方へと駆け出していた。

「こうなったら逃げるが勝ちですう！！」

そう言い残して走り去ったが、十m付近で躓いてこけた。

「わあっ！」

大きな動作で仰向けに倒れる。金色の長髪が動きに連動して流れるように靡く。

「うう……」

倒れた際に顔を打つたらしく、少女は鼻を押さえながら呻き声を上げた。

さっきとは打って変わった何とも情けない少女の姿を見る明人は、溜息を吐いて頭をポリポリと掻く。

「あの……大丈夫？」

少女に近寄り、手を差し伸べる。今の今まで逃げようと考えていたのに、少女のドジさを見ると助けてあげようと思うところ、明人もずいぶんなお人好しである。

手を差し伸ばされた少女はカツと目を開き、明人の肩に掴み掛かった。

「お願いですう！ このことは誰にも言わないで下さい！」

少女のあまりの形相に、明人は「うおっ……」とたじろぐ。構わずにさつさと逃げ出していれば良かったな、と後悔後に立つ。

「約束して下さい！ 絶対口外しないって！」

「……………ハイワカリマシタ」

しばしの沈黙の後、明人は片言で了承した。

その明らかに形だけの返答に、少女は顔を輝かせ、両手を首に回して抱き付く。

「ありがとうございます！ 本当にありがとうございます！」

「うおっ！？」

少女と密着状態になり、顔を紅くさせて慌てる。巫女服を着ていてもありありと分かる少女のスタイルは良く、その豊満な胸が彼の胸板でむにゅっと形を崩した。

（柔らかえっ！？ おまけになんか良い匂いもするし！）

少女の身体をその身を以て感じていると、

爆発音のような轟音が響き、路地の壁が吹き飛ばされた。

「探し物は何ですか？ 見つけないくいものですか？ 妖気を感じ、気配を感じ、現場に到着したんですよ〜うふっふ〜」

下手な替え歌が吹き飛ばされた壁の内部から聞こえる。中の様子は、土埃のせいで確認出来ない。

だが声の特徴からして、それは女性の声であった。

明人と少女は硬直したまま壊された壁を凝視。

数秒後、土埃から出て来たのは、予想通り女性であった。

第一印象は黒。全身黒を纏っている、二十代後半位の女性。腰まで伸びている漆黒の髪に、膝まで丈のある漆黒のロングコート。視線を隠す黒のサングラス。

「ふゝ、私が感知したのは、大体この辺りなんだけどね……ん？」
現れた女性は独り言を呟いて周りを見渡すと、二人を発見した。

> i8313 < ruby > < rb > 35 <
「宵 < / rb > < rp >) < / rp > < rt > よい < / rt > < r
p > (< / rp > < / ruby > 様あ!!」

女性と目が合うなり、少女は歓喜の表情で声を上げた。

狐の御護り 其の五

宵よいと言われた女性は、顔に掛けているサングラスを片手で調節し、しばし明人あきとと少女を見るとこちらに向かってきた。

コートを着ていてもスラリとした身体つきが分かり身長も高く、顔つきと共にまるでモデルのような印象を与える。

そんな彼女は口をへの字にして、少女を見下ろした。

「ほっほ、妖気を感じて急いで来たと思ったなら、仕事放棄して男とイチヤついてたつてか？ 燐りん」

抱き合っている明人と少女を交互に見て、意地悪かつ憤怒を込めた声色で喋る。サングラスでその眼光は見えないが、それでも鋭いようなモノを感じる。

燐と呼ばれた少女はすぐさま明人から身を離し、額から妙な汗を垂らしながら首を振った。

「い、いいいいいいい！ そうじゃないんですよ！ 敵方の“妖魔よま”との戦闘に入ってしまったって、この人はたまたま現場に居合わせってしまったんですよ！ 決してそんないやらしいことはしてませんよ！？」

燐は必死な口調で弁明をする。

宵はそこでふと、彼女の頭と下半身に注目した。

頭には猫科のような耳とふわりとした尻尾が出ており、ピコピコピコピコ動いている。

「こんの……」

それを見た宵は、顔を引き攣らせた。

静かに呟いた直後、素早い動作で少女の首根っこを掴み、地面に引きずりながら路地の隅っこへと連れて行く。

「何一般人に正体曝け出してんだーっ！ 私等のことがバレちまうだろーがよーっ！っ！」

顔を真っ赤にして少女の背中に馬乗りし、片手で耳を、片手で尻

尾を握って引つ張りながら叫んだ。

「ひゃん！ ご、御免なさいです〜！ でも勝手に「半妖態」はんようたいになつてたんですよ〜！ わざとじゃないです〜！！」

目を瞑って泣きながら言い訳をするが、それはさらに宵の怒りに油を注ぎ込んだ。

「アンタま〜だ妖術使まじゆつたら「半妖態」になつちまふ癖をどうにかしてなかったのかいつ〜！？」

今度は両手で少女の頬を引つ張る。

少女は「おれんらひゃい〜（ごめんなさい〜）」と言つてされるがままになつている。美少女と美女が絡み合う様を呆然と見ている明人は、どうしようか迷つていた。声を掛けようと思つたが、向こうはそんな状況ではないようだ。

「この馬鹿狐！」

「ひゃう〜！」

あのやりとりを見ると、やはり怪しい人物なのだろうかという考えが過ぎる。耳と尻尾が生えたコスプレ（？）少女と、全身黒一色の女性。普通に考えて怪しいのは当然だ。

（今なら逃げれるかな？）

先程は少女に抱き付かれて逃げるタイミングを失つたが、今は二人共自分に意識が向いていない。これなら気付かれずに逃げ切れるかもしれない。

（よし、逃げよう〜！）

決心し、音を立てずに足を動かして立ち去ろうとした瞬間

「ちよつち待つてくれないかね〜、お兄さん？」

明人の真後ろで、宵の声が響いた。

「なっ……」

いつの間に近付かれたのか、明人が驚愕で身体を硬直させていると、宵に肩を掴まれて回れ右をさせられる。

宵は正面を向いた明人の顔を凝視すると、眉をひそめた。

「ん？ どっかで会つたことある？」

怪訝な表情になって訊くが、明人は首を横に振って否定を答える。サングラスで目線は見えないが、文字通り目と鼻の先に顔を近づけられると、その瞳が微かに見えた。

「ん、まあいいか。それは置いといて、お兄さんも見ただろ？あの子の耳と尻尾をさ」

声色を急変させ、張り詰めた空気で尋問をしてくる。今さっきの瞬時に背後に回られたことを考えて、彼女達はやはり普通ではない。下手に逆らわない方が良さと思い、コクコクと頷く。

「私等の正体がバレたら結構困るんだよね。てなわけだから、不本意だけでもちよいと頭をパーにさしてもらおうよ？」

「パ、パーッ！？　んな……何する気だよ……っ」

宵の発言に目を見開いた明人は、頬をヒクつかせる。

そんな明人を余所に、彼女は眉を八の字にしてヘラヘラと笑った。「ああ、大丈夫大丈夫。別に頭ん中弄る訳じゃないからね。気が付いたら夢が覚めたみたいに自分の家で寝てましたって感じになるからさ。ここでの出来事も忘れているだろうね」

まるで親友と話しているかのように、宵は明人の肩をバシバシと叩く。容姿自体はとても美しいのだが、いかんせん口調とテンションが正反対。

そんな今まで会ったことのない美人の在り方に戸惑いつつも、明人は彼女の言葉にほんの僅かに安堵した。彼女達は確かに怪しい人物には変わりないのだが、それでも何処か悪人には見えなかったからだ。燐と言う少女の健気で真っ直ぐな姿。宵と言う女性の馴れ馴れしくも後ろめたさを感じさせない接し方。まだ会ってほんの少ししか経っていないというのに、そんな気持ちになる自分は本当に馬鹿だなと、明人は自嘲気味に思った。

そうこう考えている内に、宵は明人の額を指で突いた。「痛みなんて感じないから安心しな。ちよつち立ち眩みが起こる位だからね。そんじゃ〜ね」

宵が別れの言葉を紡ぎ、彼女の指が光ったように見えた直後、

「宵様！！」

一瞬の静寂を破る叫び声が、その場から離れていた燐から放たれた。

「？」

何が起こったのか全く理解出来ずにいた明人が、燐の方へと顔を向ける。が、それよりも早く自分の足がふわりと宙に浮き、地面にうつ伏せの体勢で倒された。

「あだっ！？」

身体を叩き付けられて声を上げると、今先程自分が立っていた所から、鋭く風を切る音が響いた。

「うおっと」

少し意表を突かれたような、宵の声も耳に入ってくる。

その数秒後、何かバサバサと羽音らしき音がせわしく鳴り出す。明人が何だと思い、顔を上げて見ると、そこには予想通り宵が立っていた。

人間の身体の半分程の大きさを誇る鷲を、その腕に掴みながら。

宵に首根っこを掴まれた鷲は翼を振り乱すも、彼女の腕から逃れることが出来ない様子。

「いや〜危なかったねお兄さん。後数秒気付くのに遅かったら、今頃アンタこいつに背中から嘴刺くちばしされてた所だったよ」

とんでもない光景だというのに、宵は呑気な声で明人に話し掛ける。そうしている今でも、鷲はその身を振り乱して鳴き声を上げているというのに。

「よ、宵様！ その鷲さんはさっき私と戦った鷲さんかと思われま
す！」

その場から離れている燐は、アワアワと声を荒げている。

明人は啞然とした様子で宵と鷲を見つめ、現在の状況を考える。どうやら宵と話していた時に、この鷲が明人の背後から迫って来て

いたようだ。それを寸での所で宵が気付き、明人に足払いを掛けて危機を脱した様子。

「あれ程力の差を見せたというのにまた襲い掛かって来るなんて……」

「ま、差し詰め私等の警戒が解けて、油断した所を不意打ちしようとしたんだろっね」

事態に置いてけぼりの明人を余所に、燐と宵は呆れたように話す。無駄な抵抗と分かりつつも、鷲はなおも暴れ回る。そんな鷲の姿を、宵は溜息を吐いて見つめた。

「別に私に不意打ちなんて下らないことしようとするのは構わないけどさ」

彼女はそこで区切り、サングラス越しの鋭い眼光を鷲に向けた。

「何の関係も無いただの少年ガキごと貫こうだなんてやり方は……気に入らないね」

冷たく言い放った後、鷲を掴んでいる腕を大きく振りかぶり、路地の壁に目掛けて勢い良く投げ飛ばした。鷲の身体は目にも留まらぬ速さで壁に激突し、厚さ数十センチのコンクリートを容易く砕く。「おわあっ!？」

強烈な爆風が起こり、近くにいた明人の身体が地面に転がる。

その拍子に、ズボンの後ろポケットから財布が抜き出た。長方形で折り畳み式の一般的な形をした財布は、丁度中の様子が分かる方向に折り曲げられ、クルクルと舞う。遠心力により、財布の中身はバラバラと投げ出された。

「うおい!!」

宙を舞う千円札・五千円札・会員カード・割引または無料券を見て、明人は慌てて声を荒げた。地面を這いつくばるように動き、それらを回収しようとする。

「あ、こらっ、危ないよお兄さん」

必死になって自分の財産を回収しようと躍起になっている明人を視界の隅に捉えた宵は、声を掛ける。

しかし明人は「えつと確か財布には七千円入ってたよな!? 今五千円取ったから後千円二枚だな!」と、元の財布の紙幣の枚数と放り出された紙幣の枚数を計算していた。

宵はその姿に溜息を吐いて頭をポリポリと搔くと、「しょうがないね」と呟き自分も手伝ってやるうと思ひ、宙を舞っている諸々に目をやった。

「っ!」

そこで、彼女の動きが止まる。

目を大きく見開き、一枚の会員カードを凝視した。それはただのレンタルビデオ屋の会員カードのだが、彼女はそのカードに書かれている名前を見ていた。

「……柏木、明人?」

独りでに呟いていた宵に、明人は自分の名前がどうかしたのかと、不審に思った。

> i 8 4 1 3 | 3 5 <

狐の御護り 其の六

宵はヒラヒラと舞う会員カードをキャッチすると、しばし呆然とそのカードを見つめた。

「か……し……わ……ぎ……あ……き……と」

改めて、会員カードに書かれている名前を呟く。

その様子を明人は怪訝な表情で観察し、やがて彼女に近付いた。
「……………」

「あの……返してもらって良い？」

恐る恐る宵の顔を覗き、カードを指差して声を掛ける。

すると彼女は会員カードを放り投げ、明人の肩に掴み掛かった。

女性とは思えないような握力で掴まれ、明人はやや顔を強張らせる。

「お兄さん、まさか柏木明人かしわぎあきとなのかい!？」

「いででっ! それがどうしたってんだよ!? てゆうかカード!」

驚いたような形相で訊く宵は、最終確認するかのようになり、明人に訊いた。それに対して明人は何を当たり前前まへのことを、と言いたげな様子。
子。

明人の返答に宵は笑みを漏らし、離れていた燐りんの方へと駆け寄った。

「何だい燐! まさかもう見つけていたなんてね! やるじゃないか!」

「はい?」

褒め称えてくる彼女に、燐も? マークが頭上に飛来して何が何だか分からない。

「宵様、あの方がどうかしたんですか?」

「馬鹿! 名前で分かんないのかい!？」

何やら大事な話をしている宵と燐を尻目に、明人は地面に虚しく投げられた会員カードを回収した。ペチペチと指で弾いて汚れを落とすと、改めてカードに目を通す。何の変哲もないただのカードで

あり、自分の名前が書いてあるだけである。

それが一体どうしたと言ったと、明人は不審な目で彼女達を見る。宵が一方的に話した後、燐が「え！ 本当ですかあ！？」と歓喜の表情を浮かべていた。

今度は何だ、と眉を顰^{ひそ}めていると、燐がこちら駆け寄^よって来る。

その表情は輝いており、まるで芸能人を生で見た時のようだ。

「どうも自己紹介が遅れました！ 私、燐と申します！ 御逢い出来てとても光栄です！」

まるで、と言うか本当に芸能人に会ったような言葉を放つ。感情の昂りを表すように、耳はヒョコヒョコ動き、尻尾はパタパタ揺れている。

（え？ 俺テレビに映ったことある？）

素朴な疑問に首を傾げていると、燐は構わず喋り続けた。

「私、あの方には直接御逢いしたことは無いんですけど、凄く尊敬させてもらってます！ これから宜しく御願いますね！」

「は？ あの方？ これから？」

意味の分からないことを口走る燐に、さらに明人は首を曲げる。

「一体何の話」

「はいアンタ達、お喋りはそこまでにしときな」

明人が質問しようとしたと同時に、後ろにいた宵に遮られた。

すると、綻んでいた燐の表情も瞬時に緊張したモノになる。

明人が後ろに振り返ると、宵の後ろ姿が目に入る。そして彼女の首は上に向いていた。

釣られて上を見上げると、狭い路地の建物の屋上よりも高い空に、何羽もの鳥が舞っていた。鳩や鴉よりもかなり身体が大きい。十中八九、先程の鷺の仲間なのではないのかと、明人は思った。

「燐、アンタは明人を連れて撤退。ここは私に任せな」

空を見上げながら、宵が冷静な声で指示を出す。

「はい！ では明人さ」

燐が返事をし、耳と尻尾を引っこませて明人の手を取り、路地を

出ようと走り出した直後、

すぐ隣の崩れた瓦礫の奥から、一羽の鷲が、金切り声を上げて飛び出してきた。

今さっき、宵が壁に投げ付けた鷲である。

燐が咄嗟に炎で迎撃しようとしたが、間に合いそうにない。ギリツと歯を食い縛り、明人を庇うように身体を前に動かす。

が、それよりも速く真横から手が飛び出し、それが鷲の首を乱暴に掴んだ。

「まったくアンタは黙って寝てろっつーの」

手の主は、宵。

サンングラスの奥に潜む鋭い視線で鷲を睨み、一気に握力を振り絞る。ミシミシ、ブチブチと、生々しい音が響き、鷲は断末魔さえ上げることが出来ずに絶命した。

それが合図になったのか、上空を舞っていた鷲達が一気に急降下して来た。

「ほれ、とつとと行つた」

宵が空の鷲達と向き合い、シツシツと手を振る。

燐は気を取り直し、明人の手を握って走り出した。

「つてちよつと待て うおう!？」

明人も明人で状況の整理をしたかったのだが、燐に強く引つ張られて言葉が途切る。瞬く間に二人の姿は、薄暗い路地の出口へと消えて行った。

「さくで、いつちよ戦るか」

路地に残された宵は両の拳を合わせて骨を鳴らし、鷲達を睨んだ。

近恵市の住宅街を、明人と燐は走っていた。

金髪巫女少女に手を引かれる少年という見たこともない構図は、道行く人々の視線を嫌でも集中させている。注目の目に晒されている明人は焦った顔をしているが、燐はそんなことは全く気にしていない様子。

> i8594—35<

「明人さんの家は何処にあるんですか？」

走りながら、燐は顔を振り向かせて訊いてきた。

「いや、俺の家なんか行つてどうする気!？」

状況や事情が全然理解出来ない明人が質問で返すも、彼女は「早く教えて下さい!」と連呼するだけ。

掴まれている腕を無理矢理引き抜こうとしても、ビクともしない。

「うったく! そこ! その角を右に曲がるんだよ!」

やがて観念したのか、明人は止むを得ず道の指示を出した。

「はい分かりました! 右ですね!」

自分が質問したことには、しっかりと対応する燐。

そこでふと、彼女は上空に気配を感じ、顔を上げた。明人もそれに合わせて空を見上げると、数羽の鷲が、自分達の先回りをするかのように飛び回っていた。

「む……。やっぱり他にも潜んでいましたか」

燐は苦い顔つきになって言うと、明人を掴んでいない方の手をかざした。

「戦闘は止む無し! 一般の方々を巻き込む訳にはいきません! 結界を張らせていただきます!」

かざされた手が金色に輝き、その光は瞬時に四方八方へと散って行く。

(いや、すでに一般人の俺巻き込んでんだけど……)

燐が言ったことに文句を言いたかった明人だったが、どうせ無駄だろうと思いやめておくにした。

「明人さん! 次はどちらに行けばいいんですか!？」

「え、ああ、左の角だよ!」

不意に道を聞かれて答えると、彼女は顔を歪める。

「やっぱり先回りされてる方向ですね……！ 明人さん、角を曲がったら気を引き締めて下さいね！ では、行きます……！」

言い終えた直後、二人は角を曲がった。コンマ数秒後、二羽の鷲が嘴を開け、金切り声を上げて突進してきた。

鷲が二人に到達するよりも早く、燐の頭と尻から耳と尻尾が現れ、片手に炎が纏われる。

そのまま、燐は地面を蹴って跳躍。明人もそれに釣られて身体が舞う。二人は地面から四、五メートル程の位置におり、大鷲は地面にいた二人の高さに合わせて突進していたので、空振りをした。

燐は空中で半回転し、逆さまの体勢で鷲の方に身体を向ける。攻撃がかわされ、態勢を整えようとする鷲よりも速く、片手の炎を水平に薙ぎ払い、鷲に向けて飛ばした。見事鷲に命中した炎は、勢い良く燃え上がった。

鷲を撃退した燐は華麗に地面に着地したが、すぐ隣で「あでっ！？」とバランスが取れずに地面に叩き付けられた明人の声が響く。「では敵も撃退したことですし、気を取り直して行きましょう！」

意気込んだ燐は、明人がまだ地面に倒れていることに気付かずに走り出した。

「えっ！？ ちょっと待 あだだだだだだだだっ！！ 擦れるっ……！」

彼女に引きずられながら、明人は着々と家へと向かって行った。

狐の御護り 其の七

近恵市このえしの駅周辺路地。

そこでは、地面にも空にも、無数に飛び回っていた鷲の姿は無い。あるのは、何処までも深い黒。

その身を漆黒に包んでいる、宵よいであった。

彼女は現在口に煙草を啜え、煙を吹かしている。

「ふう……つまねえ相手だったね」

ポツリと呟いた彼女は、ほとんど吸殻となりつつある煙草を吐き捨てた。

一体どのような戦いが繰り広げられていたのか、辺りには不気味な静寂だけが漂っている。傷一つどころかコートに汚れすら見当たらない宵。そして何処に消えてしまったのか、彼女と戦ったであろう鷲の姿。

「さてと、明人と燐の所に行くとするかね」

悠然と路地に佇んでいた彼女は、やがて出口へと歩いて行った。

燐と明人は、道中ゴタゴタあったが何とか家に到着した。

「ここなんですか」

家を見上げて、燐は関心したように言う。

その横にいる明人は、服が所々汚れている。

「今度からは……ちゃんと状況確認してから……走ってね」

「はい？ 何のことですか？」

疲れ果てた声でそう訴えると、彼女は不思議そうな顔で振り向いた。

「気付いてないんかい……」

彼女の邪気の無い顔を見ると、明人はこれ以上責める気にはなれ

ず、ぐつたりと肩を落とした。

燐は明人の手を握ったまま、さっそく玄関へ近付く。ドアノブを握って捻ろうとするが、鍵が掛かっているため、開かない。

「明人さん、早く入りましょう。いつまた敵が襲ってくるか分かりません」

だから敵とは何なんだと明人は首を捻ったが、仕方なく鍵を開けて玄関に入る。

「御邪魔しますです」

それに続いて、燐もさぞ当たり前のようになり込んだ。

「ちよつと待て！　なんで君まで入んの！？」

「今言っただじゃないですか。敵がまた襲ってくるかもしれないので、建物の中で身を匿った方が安全だからです」

そう言うのと彼女はやや緊張した面持ちでドアから顔だけを覗かせ、外の様子を伺う。周辺には特に変わったモノはなく、空を見上げても驚は見えず、夕日に照らされるだけの空が広がっていた。

「今は大丈夫のようですね」

辺りが安全だと分かり、安堵の息を漏らして燐はドアを閉めた。

「あの、もう答えてくれない？　君って何者なの？」

明人がようやく落ち着きだしたことを確認し、燐に質問し出した。
一瞬燐はキョトンとした表情になり、

「あれ？　自己紹介していませんでしたっけ？　私の名前は燐です」

「それは聞いたから知ってるっての」

彼女の言葉に軽くツツコミを入れ、明人は溜息を吐く。

「だから正体だよ正体。どう考えても普通の人間じゃないだろ」

彼の質問の真意が分かった燐は「なるほど！」と頭に電球を浮かべた後、頭と尻に耳と尻尾を現せ、

「これを見て分かりませんか？」

「分かるかっての！」

燐の不思議そうな顔に、思わず明人はずっこけた。

その反応に燐は首を傾げて、眉をひそ顰める。

彼女とのやりとりに疲れてきた明人は、分かりやすく言い始めた。「つまり！ その耳と尻尾は何なのか！ 普通の人間じゃないのなら何処から来た何人なのか！ それらを教えてくれよ！」

その説明に憐はしばし沈黙した後、「なるほど！」と再び頭に電球を浮かばせる。それを見た明人は（本当に分かってんのか？）と不審そうな目。

「私は“妖魔”という種族の“狐族”出身の者です。」

向日葵のような笑顔で言い放った。

明人はふと何処かで聞いたことのある単語だと思っただが、全く理解が出来なかった。

「ヨウマ？ コゾク？」

「はい、そうです」

怪訝な表情で反復すると、彼女は笑顔のまま頷いた。

「“妖魔”と言うのは、人間の方から言わせれば「妖怪」と言う存在と同じです。そして私達はその中の“狐族”つまり狐の“妖魔”なのです。だから私達は人間ではないのです。分かっていただきましたか？」

妖魔「妖怪。人間ではない。」

今度は何処となく分かりやすい感じだったが、まだ収集がつかない。数秒考え込み、とんでもないことを聞いたのを理解した。

「妖怪！？ 人間じゃないの！？」

「妖怪じゃなくて“妖魔”ですよ」

驚愕した明人の言葉に、憐は笑顔のまま間違いを指摘した。

「じゃ、さっきのサングラスの人も！？」

「はい、あの方は宵様と言って、“狐族”の中でも最も強い方々・『肆堂光』の一人なんですよ。しかも『肆堂光』としての序列はなんと壹位！」

質問されたことによろやくスラスラと答える彼女に、明人は全く

疑いなく受け入れる。今までとんでもないモノを見てきたので、疑う余地などなかった。そこでふと、宵のことを思い出していた明人は不意に思った。

「……てゆーか、君等の正体って、バレちゃまずんじゃ……」
先程、宵が自らの眼前で言ったことを思い出し、恐る恐る訊いてみる。

「いえ、大丈夫です。私達は明人さんを見つけることが任務の一つですので、明人さんに正体が分かれても、問題ありません」
その質問に燐は胸を張って自信たっぷりに言い放った。

自分を見つけるのが任務　そう言われてまた頭が混乱してきた。そういえば宵も、「まさかもう見つけていたなんてね」と言っていたことを思い出す。

「……それで君等は俺をどうするつもりなんだ？」
再び緊張した声で訊く。常識的に考えて、こんな摩訶不思議な者達に「見つけることが任務」と言われては、何をされるか分かったものではない。

だが燐は笑顔のまま、明人の片手を両手で握り、

「貴方を見つけた以上、私達のすべきことは後一つです。明人さん、貴方の命を狙おうとする“妖魔”から、貴方を御護りすることが私達のすべきことなんですよ」

と、優しくも力強い声で言った。

同時刻、近恵市の一画にて。

そこは市の中心地域の歩行者天国付近の広場。広場には大きな噴水が作られており、その近くには時計も設置されていることから、待ち合わせによく使われている場所である。

夕日により淡く橙色に染められた広場には、未だに多くの人々が行き交っている。

その広場の噴水で待ち合わせをしている人々の中に、一つの影。何処か他の人々とは、纏すみれっている空気が違う。

その人影は、透き通るような董色の髪をしている少女。肩まで掛かるセミロングの長さに、後ろ髪の一部をポニーテールに括くっている。着ている衣服は半袖のシャツにクリーム色のセーターと灰色のミニスカート。そして肩には野球のバットを入れるバッグを掛けており、それだけが何やら少女とは不釣り合いで、怪しい雰囲気を放っている。

> i 8 8 0 7 — 3 5 <

少女も誰かと待ち合わせをしているのか、ただただポツリと立ち尽くしている。

しばらくそうしていると、少女の身体からピロロ、と機械的な音が鳴った。少女は表情を変えずに、身体から携帯電話を取り出した。「……………もしもし」

小さくも凜とした声で電話に出る。

『動きがあつた。今から合流するぞ』

電話の向こうからは、穏やかながらも力強い男性の音が響いた。

「そう。分かつた。じゃあ、これから、そっちに行く」

手短に話し合うと、少女は電話を切った。

電話を仕舞うと、少女は肩のバットバッグをしっかりと掛け直す。その際に、バッグからガチャツと金属音が響いた。

そして少女は董色のポニーテールを揺らしながら、広場を後にした。

狐の御護り 其の八

「……………」
貴方を御護りすることが私達のすべきこと。

燐りんが言ったことを聞いた瞬間、明人あきとは時間が止まったように呆然となった。

彼女は明人の手を握ったまま、笑顔で見つめる。

「俺を……護……る？」

拙い言葉遣いで聞き返すと、「はい、そうです」と返ってくるだけであった。？マークが脳内を締める中、とりあえず燐が言ったことを整理してみようとした。

彼女とサングラスの女性・宵よいは、人間ではない“妖魔ようま”という種族。

（……電波にも程があるが……あんなとんでもないモノ見せられたらな……）

彼女達はその“妖魔”の中の、“狐族こぎょく”出身らしい。

（まあ……あの耳と尻尾は、狐に見えなくもないかな？）

彼女達は任務に就いていて、自分 柏木 明人を見つけるのがその任務の一つでもある。

（何で？ 何で俺を見つけないと駄目なんだ？ ……こんな連中に目エつけられるようなことしたっけ？）

燐は、自分を狙っている“妖魔”から自分を護るために、ここにいると言った。

（目エつけられるって言うても、この人等は俺を狙ってる訳じゃないみたいだけどな。ん？ ……ちょっと待て……誰に何を狙われているって言ったっけ？）

少し怪訝な表情となって顔を覗き込んで来る燐を尻目に、明人は一つ一つを冷静に解釈していこうとするが、最後の疑問で徐々に顔が青ざめていく。

もう一度燐が言ったことを思い返す。

貴方の命を狙おうとする“妖魔”から、貴方を御護りすることが私達のすべきことなんですよ。

自分が護られる理由　それは自分が彼女達ではない他の“妖魔”から命を狙われているから。

「お、俺は……何で……そんな連中に命を狙われなきゃならないんだよ　」

「いんや、正確にはアンタの「命」じゃなくて、アンタが握っている「手掛かり」が狙いなんだよ」

動揺した口調で言葉を紡いだ直後、誰かの声が遮った。

その声のする方向に明人と燐が顔を向けると、それは玄関の扉の向こうからだった。

「……宵様ですか？」

何処かで聞いたことのある声だと思った矢先、燐が声の主に気づく。

「何だコレ？ ドアノブ回しても開かないんだけど……」

「あ、鍵が掛かってんだよ」

扉の向こうでドアノブを弄っている彼女に、明人が扉に近づいて鍵を開けようとする。が、それと同時にバキツと言う音と、「お、開いたね」と言う声が響いた。

扉が開いた先には予想通り宵が佇んでいた。

「おう燐。匂いを追って来たけど、その様子だと何とか家には無事に辿り着いたみたいだね」

「はい宵様。道中何度か敵と戦いましたが、明人さんには指一本触れさせませんでした」

宵の感心した言葉に、燐はビシツと型が成っていない敬礼をする。そんな二人を余所に、明人は身体を震わせて頬を引き攣られている。

「ん？ どうしたんだい明人？ なんとここで固まっちゃまって」「鍵ぶっ壊されたからだろーが！！」

その後、柏木家にはしばらく明人の怒声が響き続けた。

現在の状況も理解出来ず、頭がパニック気味になっているせいもあってか、明人は喧嘩腰で宵に突っ掛かった。しかし宵の飄々としたスルーによってやがて明人の体力が尽き、事態は収まった。

今三人は柏木家のリビングに移動していた。

テーブルを間に挟み、片方のソファーに明人が座り、もう片方に宵と燐が座っている。宵は身体全体をソファーに預け、脚を組みながら煙草を吸って偉そうな態度。燐は申し訳なさそうな表情で背筋をピンと伸ばし、ソファーの上に正座で座っている。

「それでっ……何でっ……アンタ達はっ……俺にっ……関わんだよっ……」

怒声を上げ続けていたので、息も切れ切れで明人は二人に質問する。

「ん、それよりまずは私達のことをちゃんと理解してもらわないとね」

明人の質問に宵は煙を吐き、話し始めた。

「私達は世間で言うところ、異常で異質な存在なんだよね」

「はあっ……はあっ……それは大体聞いた。確か……“妖魔”って言うって、今で言う漫画とか御伽話で出てくる妖怪みたいなモンなんだろ。それでアンタ達は狐の“妖魔”だったっけ？」

明人の言葉に、宵は「そん通りだよ」と頷いた。

そしておもむろに立ち上がり、自らの頭を指で突く。すると彼女の頭の両端に黒い毛をした狐の耳と、尻に黒い毛をした尻尾が現れた。

宵が燐に視線を送ると、それに応じて燐も耳と尻尾を現す。

その姿自体はもう見ているのでさほど驚かない明人だったが、宵の毛が黒色なのは少々意外に思った。

「これが「半妖態」はんようたい、つっー姿さ。人間と“妖魔”を混合した姿ってところだね。この耳と尻尾は決して付けてないよ？ ちゃんと身体から生えてるからね。後もう一つ「原妖態」げんようたい、つっーのもあって、それはまんま狐の姿になる状態のことさ」

そう言っていると、燐の耳を掴んで引き寄せた。

「宵様痛いですよー！」

「どっという訳か……この子は妖術まじゆを使うと勝手にこの姿になっちゃまってね。だからいつ一般人に正体がバレるか冷や冷やしてんだよ。まあ結界を張ればその心配もないけどね」

燐を睨みながら説明する中、明人が「妖術？」と呟いて怪訝な表情になった。

「アンタも見ただろ？ この子が炎を使うところをさ。あれがこの子の妖術なのさ」

その言葉で先の燐と鷲の戦いを思い出し、明人は声を鳴らして納得する。

そこで燐は気を取り直し、指先からライター程の火を現せた。

「この妖術は『火門演舞』かもんえんぶと言いまして、天の四方を司る四神獣しんじゆうの内、南に位置する不死の炎の神鳥・朱雀すゑくの術式を使用した妖術です。とは言っても私はまだ未熟なので、直接朱雀の術式は扱い切れません。ですので術式を四神獣から階級を落とした十二神将じふにしんじやうの術式に変化させます。五行説での十二神将で火気を司るのは珊底羅大将さんていらと因達羅大将いんだらです。方角を意味する十二支では、珊底羅大将は巳神で南東微南に位置し、因達羅大将は午神で南に位置します。よって朱雀に近いのは因達羅大将になります。故に私が使用する『火門演舞』は四神獣・朱雀の術式を基盤にした、十二神将・因達羅大将の術式を使用した妖術なのです」

「……………言ってることが全然理解出来ないんだけど」

訳の分からない専門用語を並べ立てられ、明人は首を横に振る。

「この子の妖術は早い話が炎を操る術だよ。それで妖術つてのは私達“妖魔”が使う特殊能力つてところだね。簡単に言えば魔法使いが使う魔法みたなモンだよ」

ギブアップ状態の明人に、宵が簡潔に説明した。彼女の説明には、何とか明人は大まかに理解することが出来た。そこでふと、気になる点が一つ。

「じゃあ、あなたの妖術はどんなモンなんだ？」

ちよつとした好奇心が沸き、宵に訊いてみる。すると彼女は人差し指を唇に持っついていき、

「それはヒ・ミ・ツ」

と、小首を傾げて可愛げに言った。彼女はみてくれはかなりの美人で、その仕草に初対面の者ならクラツときてしまうが、彼女の性格を体験済みなので、明人にとってはそれ程響かなかった。

「ま、それはひとまず置いとこうじゃないか。次にアンタが一番聞きたがつてた、何で私達がアンタを護るか、それで何でアンタが“妖魔”から狙われるか、その理由を教えてやるよ」

話を切り替えると、宵は途端に表情を一変させ、

「それはアンタが柏木博士の身内であり、博士の遺産の手掛かりを知る唯一の存在だから さ」

そう言い放った。

台詞の内容に、明人はまたしても理解が出来ず呆然となる。

「柏木……博士……って、誰？」

呆然とした状態で、理解出来なかった部分を強調して訊く。その問いに、燐が笑顔で答えた。

「明人さんの御爺様……柏木^{かしわぎ} 苑齋^{えんさい}様のことですよ」

柏木 苑齋、その名前は聞いたことがある。というより、明人の祖父の名前である。

あの豪快で細かいことは気にせず、学校の成績が悪かった時でも、「成績なんざ悪くても構わねえわ。でも、汚いことや卑怯なことだけはするな」と熱く語り、近所では「変わり者」と呼ばれていた祖父のことであった。

狐の御護り 其の九

「……な、何でオレの爺さんが、「博士」なんて呼ばれてんだよ」
動揺を隠し切れない様子でもう一度問うと、今度は宵よいが答え始めた。

「アンタの爺さんは実は“妖魔”^{よじま}の研究者兼協力者だったんだよ。こっちの世界じゃかなりの有名人でやり手の研究者だったんだよ？ アンタも博士と暮らしてたんだから“妖魔”の話の一つや二つ、聞いたことあるだろ？」

彼女に言われて少し思考を張り巡らせ、過去の記憶を思い出す。そういえば昔、よく妖怪とか物の怪の話の話を聞かされたことがある。祖父が「変わり者」と呼ばれていたのも、その妖怪や物の怪絡みのことが原因であった。当時はただの遊び話としか思っていなかったが、まさか本当の話だったとは……。

「博士は生前“妖魔”の歴史や技術を研究しててね。博士自身が編み出した妖術や術式も幾らかあるぐらいなんだよ？」

「で、爺さんの遺産つてのは何のことなんだ？」
彼女が話していると、明人あきとが呆れ果てた様子で訊いてきた。その様子には宵は少々驚く。

「おや、意外だね。もうちよつとパニくるかと思っただけど……」
「……いや、オレの爺さんならそんなことしてても可笑しくないと思っただけ」

「ほっほ、さすが博士の孫だけのことはあるね。飲み込みが早くて助かるよ」

明人が事態を受け入れたことを悟ると、彼女は感心した。

そんな宵に明人が早く本題に入るよう促し、さっそく彼女は話を戻した。

「博士が残した遺言……ああ、アンタが受け取った遺言じゃないよ、私達の一族宛の方のことさ。それには「自分がこの世に残した遺産

を護ってくれ。手がかりは孫の明人が握っている」って記されていてね。私の一族も博士には世話になつたし、博士の頼みを聞くのは良い恩返しっつーことで、遺産の手がかりを握ってるアンタのところに来たってわけさ」

そのように言われたが、明人本人は両手を挙げて困つたように首を振る。

「んなこと言つたつて、俺は“妖魔”のことなんて初めて知つたし、遺産なんてのも見たことも聞いたこともないぞ。俺が受け取つた遺言なんかにそれらしいモンなんか書かれてなかつたぞ？」

遺産どうこう以前に、祖父が“妖魔”と関係を持っていたのが初耳なので、明人が何も知らないのも無理はない。

しかし宵と燐は安心しろと言わんばかりの笑みを浮かべ、口を開いた。

「そんなこと分かつてるよ。博士も孫を危険に晒したくはないつて理由で、アンタが“妖魔”と関係するようなことは極力避けていたからね。アンタは何も知らなくて当然さ。でも博士が亡くなった今、博士と敵対してた“妖魔”の一族は、その遺産を脅威と考える奴等もいる。だから唯一の手がかりであるアンタを必ず狙ってくるだろうね」

「私達の目的は、博士の遺言を成し遂げるため、手がかりである明人さんを護りつつ、遺産の秘密を解き明かすことなのですよ」

宵が明人を護る理由を述べ、燐が自分達の目的を話した。

明人はまたしてもそれを聞くと呆然となつてしまった。

「……ちよつと待つてくんね？」

疑問に思うことが浮かび、明人は言葉を紡ぐ。

「つてゆうか……何でその遺産の手がかりがオレしかないんだよ？ 他にも爺さんが残してた手がかりがあるかもしれないだろ？」

「無理無理、博士に関連した研究所とかはもう灰同然になつてるから、手がかりも何も残つてないんだよ。ま、恐らく博士が自分の研究を悪用されないように自ら処分したんだろうね。故に」

明人が抗議をするも宵は平然とした顔でそれを否定した。
そして間髪入れ、明人を指差す。

「博士の唯一の身内であるアンタが、この世に残された博士の遺産の最後の手掛かりなのさ」

真剣そのもので言い放った。

「唯一の身内」 その言葉には理解は出来た。なぜなら、両親はすでに事故で亡くなっており、祖母も自分が生まれる前に亡くなったと聞いている。だから柏木家で残っているのは明人一人だけ。

「……爺さんと敵対してた“妖魔”ってのは、そこまで必死になつてオレを狙うのか……？」

何ともいえないような表情で問うと、宵は頷く。

「そりゃね。博士は本当に凄い人だったんだよ。“妖魔”は昔から一族同士で争っていたけど、博士のお陰で協定を結んで和平を保つことが出来た一族もあったのさ。でも、博士の行動を良く思わない一族もあるんだよ……」

彼女は喋っている途中で俯いた。燐はこれから話すことに勘付いているのか、さっきの元気が若干薄れていた。

「私達“妖魔”はね、古来から「支配」とか「生存」を懸けて争つてんの。無数にある一族が、たった一つ生き残って、日本という世界を繰るためにね。中には私達の一族のように、そんなしょうもないことに囚われない生き方を望むものもあるけど……。ま、お堅い連中は日本を独占したいがために、容赦無し問答無用に他の“妖魔”を邪魔者って見なして争いを続けている。そういう奴等が博士のやり方や技術を嫌ったり恐れたりして、敵対していたのさ」

「博士は止むを得ず、そのような人達を鎮圧するための物事にも力を注いでいたのです。ですから博士の遺産が武力行使の“妖魔”に対する兵器だと考える意見も、少なくともはないのです」

宵と燐は力強い口調で言い、明人も彼女達の言ったことはしっか

りと聞いている。

「それじゃ、その遺産を誰よりも早く見つけて自分達に被害が及ばないために、手掛かりである俺を狙ってるってわけね」

「そゆこと」

彼が自分の置かれた状況を理解すると、宵が頷いた。

彼女は明人が事態を飲み込めたと分かるなり、表情と声色を朗らかにさせた。

「ま、アンタのことは絶対護ってやるから心配ないって。私達が全力を出すからさ」

彼女の自信に満ちた様子につられ、燐も再度瞳に炎を滾らせ（無論比喻）力強く喋る。

「はい！ 例えどのような刺客が来ても、明人さんは必ず護ってみせます！」

二人の勢いに押され、明人には自然と笑みがこぼれた。

今考えてみれば、宵や燐の戦闘は目の当たりになっている。あの変な大鷲を一蹴し、確かな実力は持っていると分かる。

「分かったよ……こうなったらウダウダ言っても仕方ないし、アンタ達を信じる」

明人が納得したように喋ると、宵も満足げな表情になった。

「よし！ 事態の收拾したわけだから、これからアンタを敵さんから護るために護衛を付けさせてもらおうよ？」

「……………は？」

宵の言い放った言葉に、明人は首を傾げる。

しっかりと聞き取れていない感じだったので、宵は溜息を吐いてもう一度復唱する。

「だ〜か〜ら〜、アンタをいつでも敵から護れるように護衛を付けるって言うてんだよ。今までの話しの流れで分かるだろ？」

やや声調を強くさせ、しっかりと聞き取らせた。

すると彼女の横にいる燐が御辞儀をし、

「ではこれから、何卒宜しくお願ひしますね。明人さん」

御丁寧に言い放った。その瞬間にまたしても明人は「は？」と、さつきと同じリアクションをする。

「よし！ そうと決まったらさっそく若いモン同士、仲良くするんだよ」

宵は煙草を灰皿にねじ込み、そそくさと部屋を出て行こうとした。その様子を怪訝に思った明人は彼女を呼び止める。

「おい、何で出て行くんだよ」

当然の質問に、彼女は何気ない顔で振り向いた。

「いや、だって私は護衛役じゃないから」

「は？ いや、アンタ「達」が護衛役じゃ」

「不束者でございますが、何卒宜しくお願いしますね、明人さん」

後ろで燐の声が響き、またしても明人は「は？」という声を漏らして後ろに振り向いた。彼女は宵と違って部屋を出て行く様子はなく、居間のソファーに正座をしたまま。

明人は自分の世界へと入り、シンキングタイムに突入した。

自分には“妖魔”の刺客から護ってもらおう護衛が付く。

(それは理解出来るわ)

その護衛役は今自分の目の前にいる“狐族”の「二人」のはず。

(まあ他にいる気配が全く無いしな)

宵はそそくさと出て行こうとしたのに対し、燐はそんな素振りは見せず御丁寧に挨拶をした。

(まさか……まさかまさかまさか)

額に一気に汗が噴出して再度宵の方へと向く。

彼女はすでに居間のドアへと手を掛けており、出て行く状態満点。「アンタの護衛は燐が一人でやってもらうんだよ？ 何時何処で“妖魔”が襲ってきてても大丈夫なように、二十四時間アンタに付きっ切りですからね。ま、身の回りの世話もやってくれるし、軽い

お手伝いさんだと思ってくれりゃあ良いよ。アンタもこんな娘と一つ屋根の下で暮らせるんだから、文句無いだろ？ あ、間違っても変な気は起こすんじゃないよ」

「マジでかああああ！！？」

ムンクの叫びの姿となった明人の声が、柏木家だけでなく住宅街に木霊した。

こうして、一人の人間の少年と、一人の“妖魔”の少女との共同生活が始まった。

近恵市の中心地域。

徐々に太陽の光が薄れ、夜の闇が広がりにつつある街中で、人混みの中に紛れて宵が歩いている。彼女は明人を隣に任せ、自分は予約を取っているこの街の高級ホテルへと向かっていく最中であつた。煙草を吹かしながら、コートと同色の長髪を微風で靡かしている彼女とすれ違う人々は、男女問わずその美しい容姿に目をやってしまう。

（はあ……綺麗つつーのも考えモンだね。注目を浴びるモンの身にもなれつつーの）

心中で溜息を吐き、自分に目をやっている人々に対してそう言った。

このまま無視し続けようと思つたが、彼女は突然足を止めた。

「……………」

艶の良い唇をへの字に曲げ、口の煙草を手にとって横合いに投げ捨てる。

（世の中、普通の人間がこゝんなに熱烈で殺気が籠つた視線で見るモンかね？）

一瞬クスリと笑い、周りを見渡した。周りに見えるのは未だ自分に好奇の視線を送る人々のみ。すると彼女は早歩きで移動し出し、

若干人通りの少ない所へと行った。

ただひたすら歩き続けていると、彼女が感じる異様な視線や気配が近くなってくる。

(つたく、しょーがないねえ……)

宵はポケットに入れている両手を、ポキッと鳴らす。

そして地面を瞬時に蹴り、常人では確認出来ない程の速度で上空に飛んだ。その光景の一部始終を見ていれば、突然宵が消えたと思ってしまう程の動作。跳躍した宵は空中で一回転し、近くの建物の屋上に着地する。

微風ではなく夜風が舞う屋上で、彼女の長髪が踊るように舞う。

「さうて、わざわざこんな所に来てやったんだ。その面拝めさせてもらってもいいだろ？」

少々大きな声で言い放ち、屋上全体に響かせた。

数秒後、微かな足音が後ろから鳴り、宵はゆっくりと振り返る。

そこには、一人の少女が佇んでいた。シャツにセーター、ミニスカートといった普通の格好をしているが、肩には野球のバットを入れるバッグを掛けており、それだけが違和感を感じさせる。董色すみれのセミロングポニーテールヘアに小顔で整った顔立ちは、美少女と言うに申し分無い可憐さを放っている。

しかし、何処か感情を押し殺しているようなその表情は、威圧感すら感じさせる。

「何か私に用でもあんのかい？ あんならさっさと済ませてくんないかね？」

だが宵はそんな威圧感をサラリと受け流し、少女に話し掛ける。

少女は肩からバッグを下ろし、小首を傾げた。釣られて董色のポニーテールも傾く。

「お前、“妖魔”でしょ？」

少女の凜とした声に、宵は深く溜息を吐いた。

「何だ何だい何ですかあ？ んなモン確認しなくても分かり切ってるだろ？ てか私が“妖魔”だから殺気送ってたんじゃないのか

い？」

宵の呆れた口調での返答にも、少女は顔色一つ変えずに口を動かす。

「どうして、この街に、いるの？」

「はあ？ 大体そこらの事情も分かってんだろ？ 白々しいね、全く」

「お前は、「どちら側」の、“妖魔”？」

「……それを言ったところで、私に得はあんのかい？」

宵の挑戦的な返答に、少女はやがて質問を止めてしばし無言となった。

「……そう、分かった」

これ以上会話をしようとしても無駄だと悟った彼女は、バッグのファスナーに手を掛ける。バッグを開けると、手を差し入れて中身を引き抜いた。

その手に握られていたのは、一振りの日本刀であった。

少女の持ち物としてはあまりにも不釣り合いかつ非現実的な物。

落ちていた動作で鞘から刀身を抜かせた少女は、右手に太刀を、左手に鞘を握る。

> i 9 4 3 5 | 3 5 <

「なら、力づくで、聞き出す」

刀を向けられた宵は、ニヤリと口を歪めた。

「面白いね。誰に向かって喧嘩売ってんのか、身体で教えてやるよ」

狐の御護り 其の十

夜の闇が覆う屋上で、宵と董色の髪よいの少女は対峙していた。

少女は両腕を横一直線に伸ばし、十字架のような構えで太刀と鞘を握る。

対する宵は両手をコートポケットに突っ込み、身構えることなく佇んでいる。

二人はそのまま動かない。動くのは、夜風に流されて靡く彼女達の髪や服のみ。

睨み合う二人は、互いに相手の出方を伺っているといった様子。

「……じれつたいね。ほら、さつさと来ないかい」

沈黙と制止に耐えかねたのか、宵が口を開いた。

「ポツケで両手を防いでいるつてのに、こんな隙だらけの状態を狙わないなんて馬鹿のすることだよ？」

「……そんなこと、信用出来ない」

宵の言葉に、少女は顔色一つ変えずに言い返した。

「そんな、ふわふわした服、着ている奴は、高確率で、武器を隠し持つてる。すぐに間合いに、入るなんて、それこそ馬鹿の、すること」

宵のコートを見据え、淡々と言い放つ。

少女の言い分に宵は「ああ」と、納得したような呆れたような声を漏らした。

「んじゃこれなら文句無いね」

そう言うのとポケットから両手を取り出し、コートのベルト部分に持っていく。彼女のコートは繋ぎ目に関してはファスナーが付いておらず、内部に取り付けられているベルトがその役割をしている。胸元、胸下、腰と、上から順々にベルトを外し、全てを外すとコートを脱ぎ捨てた。

「さあ、掛かって来な」

コートを脱いだ宵は、長袖のワイシャツに黒のズボン姿となった。宵の性格が表れているのか、シャツにはネクタイは巻いておらず、ボタンも上部分はかなり外れており、胸が際どい所まで露出している。

少女はそんな宵を一瞥すると、脱ぎ捨てたコートに目をやる。コートの内部には何も武器らしい物は無く、チラリと見えたのは煙草の箱とライターだけであった。

「分かった……」

自分が言い放った疑問を解決してくれた礼なのか、少女は宵の挑発に乗る。

少女は十字架体勢のまま膝を少し曲げ、軽く跳んだ。地面から三十センチ程の高さまで跳び、やがて重力に引かれて地面に着地する。が、少女の足が地面に触れようとした瞬間、爆発音が響き、少女の姿が消えた。

「
」
宵は目を離さずその光景を見ていたが、少女が消えたと認識した直後には、少女は眼前に迫り、得物を握った両手を振るおうとしていた。

> i 9 9 0 2 — 3 5 <

（なぐるほど、『縮地^{しゅくち}』かい。まだガキだつてのに大した奴だね）
『縮地』 武術の技の一つであり、瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角に入り込む体捌きを指す。

宵は突然の出来事にも、正確に何が起こったのか、少女が何をしたのかを瞬時に理解した。

少女は鞘を握った左手を、宵の脳天目掛けて振り下ろす。

宵は緩やかな足捌きで身体を横に移動させて攻撃をかわし、少女の左手の外側に回り込む。これなら太刀を握る右手からも距離が開き、次手の攻撃にも余裕を持って対応出来る。

しかし少女はそれをすでに読み取り、身体を勢い良く時計回りに回転させた。回転の遠心力を利用し、左側に回り込んだ宵に右手の太刀を振るう。左側に身体を移動させたことにより、体重がその方向一点に掛かっている。その状態では、反対方向から迫る太刀をかわすには無理がある。

宵はそれでも余裕の笑みを崩さず、迫り来る刀身を見据えて拳を握り締め、高速のアッパーで刀身を弾いた。少しでもタイミングがズレれば、拳が真つ二つになるか、空振りをして自分に刃が襲い掛かってしまう。正確に刀身の側面を殴るという離れ業を繰り出され、少女の顔に僅かながらも驚きの色が垣間見えた。

少女は太刀を弾かれた勢いを利用し、バックステップで宵との距離を開けた。

宵は手首をクルクルと回し、「なるほどね」と言う。

「先手に困である鞘の打撃を繰り出し、後手に本命の太刀の斬撃で相手を仕留めるってところかい？ 先手の鞘はあくまで困でしかないから、かわされても問題無しで当たればラッキーってくらいしか思っていないだろ。鞘の困により相手が僅かに漏らす隙を瞬時に判断し、そこを本命の後手の太刀で叩つ斬る。ま、刀の使い方としては間違っちゃいるけど、実戦向きな剣術だとは思つよ」

彼女は少女を見つめ、感想と言う名の分析を言い放つ。

戦術を言い当てられた少女は「……当たり」と一言呟いた。

「さくでどうする？ 懲りずにまた同じやり方で掛かって来るかい？」

「……どうだか」

言い終えるなり、少女は再び地面を蹴って爆発的な加速力を放ち、姿を消した。

少女は宵を通り越し、背後に回り込む。ザザザッと、靴底と地面の摩擦音が響く方に宵が顔を振り向かせようとした瞬間、再度爆発音が鳴り響いた。後ろに振り向いた時にはすでに少女はおらず、宵の身体の真正面に回り込み、後頭部目掛けて太刀による突きを繰り

出していた。

だが、宵は後ろに振り向いたまま首を傾げ、その突きをかわした。
「なっ　「くっ！」」

驚きに彩られた少女の声は、すぐさま喉を詰まらせたようなモノに変わる。

その原因は、彼女の腹部にめり込んだ宵の拳。ミシリと嫌な音が鳴り、少女の眉が僅かに揺れる。

少女は頭をすぐに切り替えて左手の鞘で反撃しようとしたが、それよりも速く宵の蹴り上げが少女の顔面を貫いた。

そのまま後方に吹き飛ばされた少女は空中で一回転して体勢を整え、安全に着地する。すぐに追撃に対応出来るよう、顔を上げて太刀と鞘を構えようとするも、宵はすでに間近に迫っていた。そして彼女の蹴りが再び襲い掛かる。

「くっ！」

かわすことは無理だと判断した少女は太刀と鞘を交差させ、防御の体勢を取った。蹴りが直撃し、衝撃が太刀と鞘から少女の全身に伝わり、勢いに押されないように踏ん張る。

「もういつちよいくよ」

太刀と鞘の向こう側にいる宵が、さらに回し蹴りを放った。立て続けに襲い掛かって来た攻撃に、防御が弾かれ少女の身体が再び吹き飛ばされた。屋上の端にある鉄柵に背中が激突し、ゴホッと少女は咳込み、肺にある空気を全て吐き出した。

鉄柵にもたれながら尻餅を付いた少女は、息を整えながら顔を上げて宵を睨む。

「さっき私の頭貫こうとした時、完全に入ったと思っただろ？　正直言っとさ、刀を握った奴とは今まで腐る程闘った経験があるからね。そのお陰で今じゃ刀を振った時の風を切る音だけで、どんな攻撃繰り出してんのかすぐに判断出来るようになったちまってね。残念でした」

舌を出し、子供のような仕草で少女をからかう。先程の少女の突

きをかわずことが出来たのは、今話した経験によるモノだろう。

「こんなの、全然、効かない」

少女は息が整うとゆっくりと立ち上がり、太刀と鞘を構える。

その姿を見るなり、宵は溜息を吐いた。

「ったく、こんだけやられてもまだ力量の差に気付かないかね。

これだからガキって奴は」

頭をポリポリと掻いた宵は呆れたような声を放ち、両手をズボンのポケットに突っ込む。少女はその行動に眉を顰める。

「言っとくけどさあ」

そんな少女に向かって宵は緩やかに言葉を紡ぎ、

「私が本気出せば、こうやって突っ立ってるだけでアンタをぶつ殺せるんだよ？」

一音一字一句、しっかりと言い聞かせた。

次の瞬間、宵の漆黒の髪が重力に反するようにユラリと舞い、彼女の身体から突風が巻き起こった。いや、突風はあくまで比喩。実際は突風にも似た、強烈な気迫・威圧感であった。ビリビリと肌を震わせる圧力に、少女はこめかみに汗を垂らして歯軋りをする。

満月をバックに佇む宵の表情は影に遮られてはつきりと視認出来ず、彼女の三日月状に歪む口だけが何とか確認出来た。その邪悪とも言える姿に、少女が汗を垂らしながら改めて太刀と鞘を握り締めると、

「もう充分だろう。これ以上鬪ると言うなら、ここからは俺が相手になるろ」

屋上に穏やかながらも力強い声が響いた。

宵と少女がその声にピクリと反応した時には、二人の間を割るように、一人の男がその場に佇んでいた。

狐の御護り 其の十一（前書き）

遅くなってしまい、申し訳ございません。

それと今回挿絵はありません。前回出てきた「男」の立ち絵を描こうと思ったんですが、どうにも自分のイメージ通りに描けず断念しました。

狐の御護り 其の十一

現れた男は少女に背を向け、宵に立ちはだかるように佇んでいた。銀色に輝く髪に、金色に煌めく真っ直ぐの瞳、汚れが一つも見当たらない純白のコート、まるで宵とは正反対の姿をした男。

「勝手な行動は止めるとあれだけ言っていただろう」

「うっ……ごめん」

男が顔を振り向かせて言い放つと、少女は顔を俯かせて謝る。

「……………そーゆーことかい」

男を見るなり、宵は口をへへの字にして呟いた。その呟きを聞いた男は、顔を正面に向かせる。

「お前の趣味は弱い者苛めか？」

金色の瞳で宵を見据えながら、男は呆れたような声を発した。

その言葉に宵は眉を八の字に動かし、肩を竦める。

「な〜に言ってるんだい。私はただ売られた喧嘩を買っただけだよ？」

「痛めつける必要はあったのか？ 買うにしても、初めから先程し

たように殺気を放っていたら戦意喪失を容易に誘えただろう」

「最近のガキってのは分からず屋が多いからね。痛い目に遭わせな

いと分かるうとしないモンなんだよ」

宵の屁理屈のような正論のような言い分に、男はやれやれと溜息を吐く。

「とにかく」

そして一言区切り、

「身内を傷付けられたんだ。少々落とし前をつけさせてもらおうぞ」
敵意が籠った声色で言い放った。

その様子に宵も怯むことなく口を歪めると、ポケットから手を引き抜いて軽くステップを踏んだ。

「良いねえ。私もどっちかつーと弱い者苛めより強い者苛めの方が好きで ね！」

先手必勝か、宵は男よりも先に動き、一瞬で懐に潜り込んだ。顔に笑みを貼り付け、拳を握り締めてアツパーを繰り出す。骨すら物ともせず砕くその拳が、男の顎に叩き込まれる。

の筈だったのだが、それよりも早く、宵の身体が真横に吹き飛ばされた。

バァン！！ と鋭くも鈍い音が響き、宵は数メートル空中を吹き飛ばすと首から地面に叩き付けられた。

男の方はと言うと、右手を肩の位置まで振り上げた状態で佇んでいる。

一番驚愕したのは、それを離れて見ていた少女であった。一瞬何が起きたのか理解出来なかったが、男の体勢を見ておおよその予想はついた。

男は単純に迫って来た宵を殴り飛ばしたのだ。

宵が懐に潜り込んだ動きの速度は、少女の『縮地』よりも速い。にも関わらず男は間合いを詰められたその状態から、身構えることなくノーモーションで宵を迎撃したのだ。考えられないような瞬発力である。

頬を殴られた宵は横合いに激しく転がるも、手足に力を入れて四つん這いの体勢で踏み止まる。口の中に溢れた血をペツと吐き出し、手の甲で口元を拭う。

「……ふーん。どうやら腕は鈍っちゃいないようだね」

「お前の方こそ、まさか今までぬるま湯に浸かっていたんじゃないだろうな？」

宵はさほど驚いたようには感じられず、普段と変わらない様子で喋る。男は少しからかうような口調で喋り、宵の様子を伺う。

その二人の会話のやりとりを聞き、少女は違和感を覚えた。二人の会話には、初対面という空気が感じられない。まるで以前にも会ったことがあるかのような雰囲気を感じられる。

「馬鹿言つてんじゃないよ。私を誰だと思つてんだい？」

「ではその自信が嘘か本当か、試させてもらおうか」

二人はそう言い合うと後は黙り込み、佇んだまま睨み合う。

宵は少女を怯ませたあの凶悪な気迫を放ち、男もそれと互角の闘気を放つ。

見えざる力のぶつかり合いに、離れた所で見ている少女の身体がビリビリと震えた。

「おい」

「あ？」

少女が足腰に力を入れ、倒れないように踏ん張っていると、男が不意に宵に声を掛けた。それに対し宵は眉を顰める。

「こんな街中で派手な妖術を行使しての闘いをするつもりなのか？」

男が言い放つた問いに宵は口をへの字に曲げ、頭をポリポリと掻く。

「うーん……確かに冷静に考えてみりゃ、私とアンタが本気で闘つたら」

「この街が荒野になつてしまつたら」

「この街が荒野になつちまうだらうね」

二人合わせて全く同じ発言をした。

その後、男は肩を竦め、宵は溜息を吐いた。

「力が強過ぎるっつーのも考えモンだね」

「ここは純粋な力の勝負といこうじゃないか」

男はそう言い放つと、ゆっくりと歩き出して宵に近付こうとする。宵もそれに応じて足を動かし、男に近付く。

やがて二人が交差しようとした瞬間、互いが拳を握り締め、それを互いの顔面に放ち合った。大砲を撃つたような轟音が二人の間から響き、屋上全体の大気を震わせた。

屋上の遥か下の街では、「何だ！ 雷か！？」「爆弾じゃねえの

!?」等と騒ぎ立てている人間の声が微かに聞こえる。
そんなことはお構いなしに、二人は闘いを続行する。

二人が同時に放った拳は見事互いの頬に命中したが、それだけで二人の闘いは止まらない。

初撃が終わったコンマ数秒後には、男と宵はすでに次の攻撃に回っていた。次の攻撃とは言っても、内容はシンプル。

握り拳を放つ。そしてそれが終わるとまた次の拳を放つ。ただただその繰り返しである。

二人は残像が残る程の速さで拳の連打を繰り返し続ける。まるでマシンガン式の大砲のような有り得ない轟音が響く。

しかしその攻防が十数秒程続くと、変化が訪れた。宵が押され始めたのである。

男が繰り出す拳を全て弾き返していたのだが、不意に一発の拳が彼女の腹部に命中した。聞き取れない程の舌打ちをした宵の顔に、さらに一発、男の拳が命中する。

やはり純粋な肉体的な強さは男の方が上なのか、続けてこめかみ辺りに拳を直撃させると、宵の身体がやや斜め後ろに傾いた。

その隙を見計らい、男は足腰に力を溜めて脇腹に目掛け蹴りを放とうとした。

宵はそれを瞬時に察し、後ろに傾いた体勢を利用してバック転をして距離を取る。

男の蹴りに移行しかけた足が、ピタリと制止した。
それを目の端で捉えた宵は口を吊り上げて笑い、足が地面に着くと間髪入れずに強靱な脚力を使って地面を蹴った。コンクリートの

地面が砕け、高速移動をした宵の身体は男との間合いを詰める。

蹴りを制止させている中途半端な体勢の男の懐に潜り込み、ボディブローを繰り出した。無防備な状態で攻撃を喰らった男の身体は、靴底と地面を摩擦させて数メートル吹き飛ぶ。

宵は僅かに顔を歪めた男を見据え、追い打ちで再度男の元へと走る。突風にも似た風切り音を出す拳を、男の鼻っ面に目掛け放つ。

男は首を捻ってそれをかわすと、首を仰け反らせて宵の額に頭突きをした。

「……！」
鈍い音が大きく響き、宵の意識がグルンと揺さぶられる。彼女は歯を食い縛って耐えるが、その間に男の膝蹴りが鳩尾みぞおちにめり込んでいた。

肺の中の空気が全て逆流し、声にならない息を吐く。しかし、それでも宵はニヤリと笑みを漏らした。

呼吸を整えるよりも早く、自身に埋まる男の膝を両腕で抱き締め、そのまま彼を仰向けに押し倒す。

「ひっさしぶりに効いちまったねっ……！」

笑いながら男の腰に馬乗りになり、垂直に振り下ろした拳を額に叩き付けた。衝撃が男の頭部から地面に伝わり、蜘蛛の巣のようなヒビが入る。

だが宵と同じく、男は苦痛を感じつつも犬歯を覗かせて笑みを漏らした。

反撃と言わんばかりに、自分を見下ろす宵に腕を振り上げて顔を殴り飛ばす。殴られた拍子に宵のサングラスが外れ、空中を回転しながら飛んで行った。露わにされたどこまでも澄んだ漆黒の瞳は、口と同様に笑っていた。

「……………」
二人の闘いを見ている少女は、ただただ呆然としていた。

彼等の闘いは型も形式もあつたモノではない。ひたすらに本能のままに手足を振るうという、原始的な闘いである。宵はともかく、男との付き合いがそう浅くもない少女にとって、彼がこんな野蛮な闘い方をするのを見たのは初めてであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606m/>

狐の御護り

2010年10月8日12時26分発行